
日本キャリア教育学会ニュースレター
2023 年度・春号（2023.4.30 発行）

発行：日本キャリア教育学会 情報委員会
<http://jssce.wdc-jp.com/>

※ニュースレターは基本的に春夏秋冬の年 4 回配信しています。

※2023 年度の特集テーマを「研究と実践をつなぐキャリア教育」
と設定しました。

※ニュースレターのバックナンバーは下記 URL から読めます。
http://jssce.wdc-jp.com/committee/information_comm/

+.....+

目次

【特集テーマの趣旨】

【特集】 研究と実践をつなぐキャリア教育
～心理～

[若松養亮（滋賀大学教育学部）](#)

[浦上昌則（南山大学人文学部）](#)

[川島大輔（中京大学心理学部）](#)

[中谷陽輔（社会福祉法人盛和福祉会「京都大和\(だいわ\)の家」）](#)

[山蔦圭輔（神奈川大学人間科学部）](#)

【書評】

[『ゆるい職場 一若者の不安の知られざる理由一』 松尾智晶（京都産業大学）](#)

【お知らせ】

[第 45 回研究大会](#)

[第 41 回研究セミナー](#)

[国際交流セミナー](#)

[40周年記念若手研究助成](#)

[学会への寄贈図書一覧 \(2023年1月～4月\)](#)

【特集テーマの趣旨】 研究と実践をつなぐキャリア教育

2023年度の特集では、様々な研究・実践のフィールドでキャリア教育はどのように捉えられているのか、各領域の研究者と実践者に語っていただくことで、境界を越えたキャリア教育の広がりを認識するとともに、研究と実践の結びつきを捉える機会にしたいと思います。春号（4月末発行）では「心理」、夏号（7月末発行）では「経済・経営」、秋号（10月末発行）では「教育」、冬号（1月末発行）では「社会・政治」、に関する研究・実践の視点からみたキャリア教育について、関係者から寄稿していただきます。また、多様な会員の声を反映させることを重視し、これまで研究大会等で十分に発信されてこなかった会員の活躍や、学生会員（若手）の意見も紹介していく予定です。

【特集】 研究と実践をつなぐキャリア教育 ～心理～

心理学研究とキャリア教育実践の往還

若松養亮
滋賀大学教育学部

進路指導・キャリア教育と関わる心理学研究をする立場から、研究がどのように実践に結びつけられるか、思うところを書いてみようと思います。その前に、共通理解が必要となる心理学の枠組を確認しておきましょう。

心理学の研究者はもちろん「心」に関心がありますが、その出発点は、人はどのような「刺激 (Stimulus; S と略; 外界の環境や状況、はたらきかけ)」にどう「反応 (Response; R と略)」するかという、心以外の部分にあります。そのうえで、「なぜそのように反応するのか」というメカニズムや、「なぜ異なる反応を示す人がいるのか」という個人差の説明のために、心を含む「有機体 (Organism; O と略; S に対して身体内部のしくみ)」が登

場します。進路指導・キャリア教育は S、選択された進路や意思決定の進度などはその成果という意味で R です。

私は教育心理学が専門なので、望まれる行動 (R) を、進路指導・キャリア教育 (S) によって、いかに形成・改善・促進するかを考えています。その R がなぜ望ましいといえるかを不断に問い続けることはもちろん大切ですが、その R に結びつく効果的な S を研究することによって、進路指導・キャリア教育の実践がより良いものになっていくことを意図しています。

研究のあり方としてまず、なぜその R が見られる人と見られない人がいるのかという個人差 (O) の研究が挙げられます。ただしこの種の研究には難関がいくつかあります。まず、(1)個人差の要因がわかっても、それが進路指導・キャリア教育に落とし込めるものかということです。当然ながら R の個人差と関わる変数は、養育態度や性格といった、制御や介入が難しいものも含まれるからです。また、(2)実際に R に影響しているものはその O と交絡している別の事象である可能性です。例えば進路知識の多少によって R が異なるとわかっても、その知識を増やせば R が改善するというのではなく、知識量に影響していた別のなにか (例えばキャリア発達の程度) が本当の個人差要因かもしれません。この「別のなにか」には無数の可能性があるので、先行研究の知見と自分が研究を重ねることで、少しずつ究明していくことになります。次に(3)「個人間」の比較に基づいて明らかになった個人差変数が、「個人内」の変化をもたらすのかということです。R が見られる人と見られない人という異なる人に見出された差の変数をもとに介入を行っても、その R が見られない人のなかでの変化をもたらす保証はない、ということです。

もうひとつの研究のあり方は、その R にまつわる心理学の理論 (例えば動機づけ) を参照して進路指導・キャリア教育の実践を構想し、評価するというものです。こちらのあり方では、理論をもとに発想しますから、前述のような問題はありますが、別の難しさがあります。まず(1)心理学の理論は、多くの領域 (題材) に適用できる可能性はあるものの、進路・キャリアの領域にはあてはめにくい、という領域特殊性の制約があり得ます。たとえば教科指導には適用できる動機づけの理論でも、進路探索行動の問題には、探索をせずとも進路意思決定はできてしまうことから、適用しづらいものがあります。また、(2)効果的な実践を構想・実施できても、生徒によってその効果があがりやすい人とそうでない人がいる、という適性処遇交互作用の問題もつきものです。実践の前後での変化や、統制群との違いにあまり大きな差が見られなかった場合、その実践の効果そのものが小さかったという場合と、効果がある生徒といなかった生徒がいたために差

が目立ちにくい（相殺された）という場合があります。そのどちらであったかはデータを詳細に見ればわかりますが、相互作用が予想される場合、どのような個人差変数がある実践の成否を分けたのかは新たに仮説を立てて調べることになります。また、(3)実践が仮に成功裏に終わっても、その結果を一般化するうえで、実践者が気づかない前提があり、そのおかげで上首尾な結果が見られた(にすぎない)可能性も考えなければなりません。例えば生徒たちの知的水準やキャリア発達の程度、実践者である教師との関係などです。

こう考えてくると、研究は一度や二度の調査や実践で確たる結論が得られるものではなく、少しずつ小石を積み上げるような、知見の蓄積があってようやく問いへの答えが見えてくるものと言えます。苦しい道のりにもなりますが、それでも宝探しのような、自分が初めて見つける事実があるかもしれないと思いながら、日々の研究を進めるのは嬉しい営みだと感じています。

忘れものはありますか？

浦上昌則
南山大学人文学部

読者の皆さんは、今のキャリア教育に何が不足していると思っておられるのでしょうか？ 資金でしょうか？ 人材でしょうか？ それともキャリア教育について考えたり計画したりするための時間でしょうか？ では、「創造性」はどうでしょう？

キャリアという考え方は、過去はもちろんのこと、各人が満足できる人生を送ることを目指す、すなわち将来指向的なものでもあるはずですが。また、特に子どもや若者には、望ましい将来の社会を創り出すことが期待されます。加えて、現在は、数年前には存在しなかった仕事が多量に生まれるような、また生み出すことが求められるような時代です。キャリアに関する創造性が求められるわけがありません。それは支援を受ける側はもちろん、支援をする側にもでしょう。しかし、キャリアの文脈で創造性がとりあげられることは少ないように思います。まるで忘れられているかのようにも感じます。そこで、Gelattの晩年の著作などをとりあげ、キャリア教育・研究における創造性について触れてみたいと思います。

Super や Holland ほどではないかもしれませんが、Gelatt も我が国でよく知られた名前でしょう。1962年にはキャリア選択に関する意思決定のモデル、そして1989年の論文では「積極的不確実性」という考え方を提示しています。2021年に亡くなりましたが、同年に最後の著作『Future Sense』を上梓しています。1989年に発表した論文以降、将来創造的な傾向を強め、信念や心（mind）を鍵として論じているように思います。

Gelatt は、自分の人生を創造する、社会の未来を創造するといったことを、意思決定の枠組みから論じます。意思決定においては、「何を求めているか」「何を知っているか」「何を信じるか」「何をするか」の4つが重要な要因になると位置づけます。その上で、従来の合理的意思決定と積極的不確実性の枠組みから、逆説的な2つの極をもつ以下の4つの原則を示し、創造的な意思決定にはその両極を考慮する必要があると指摘するのです。

原則1：何を求めているのかに集中し、かつ柔軟に対応する

原則2：知っていることを意識し、かつ警戒もする

原則3：信じていることについて、現実的かつ楽観的である

原則4：何をするかについて、実用的かつ魔力的（magical）である

合理的な意思決定は、これら逆説の前者、つまり「集中」「意識」「現実的」「実用的」な極だけを強調します。しかし創造的な意思決定をするためには、もう一つの極（「柔軟」「警戒」「楽観的」「魔力的」）をも考慮しながら考える必要があるというのです。

これらの原則について理解するにはもっと説明が必要だと思いますが、紙幅の関係から、関心をお持ちであれば文末の文献にあたっていただきたいと思います。ここではひとつだけ、Gelatt は、意思決定において「何を信じるか」以上に重要なことはないかもしれないと指摘している点に触れておきたいと思います。先の原則3にある現実的とは、自分の信念を認識し受け入れることであり、楽観的とは、自分自身や将来に関する肯定的、積極的な信念を持つことといえます。

このように信念を重視するのは、彼は「信じることは見ることであり、見ることは実行することである」という前提にたつからです。たとえば「大学へ進学することはキャリアにおいて重要である」という信念は、「キャリアにおける大学のメリットのみに目を向ける」という見方（世界観）につながり、そういう見方は「(脇目もふらず) 大学へ進学しようとする」という行動に影響するというような関連性を前提としているという

ことです。つまり今もっている信念を認識する（現実的）と同時に、将来についてより肯定的な信念（楽観的）を持つことが、積極的、創造的な行動につながると考えられるのです。

メジャーリーガーの大谷選手の活躍で、「夢が人生をつくる」というフレーズが注目されました。似たような格言はいくつもみられますが、これらが格言のようにみられるということは、多くの人がそれに賛同するものの、それを実行するのは難しいことを理解しているためでしょう。そして Gelatt を援用すれば、その難しさの根は、創造的な信念、夢をもつところにあると考えられます。

さて、こういう Gelatt の考え方に納得する（誤解しない）ためには、彼の「将来」のとらえ方も理解しておく必要があると思います。彼は、心の中に将来は存在するという考え方をとります。将来を、人とは独立して外界に存在するものとみなしません。我々は心の中で現実を作り、それを見ているとし、将来もそこにのみ存在するととらえているのです。それゆえ、将来を心や信念で論じるのです。

こういったことを踏まえると、キャリア教育、支援では、創造することを対象者任せにしないことが重要ではないでしょうか。大谷選手がどうだったかは知りませんが、二刀流を追求したいけど、ピッチャーもしくはバッターに専念する方が…と考える子どもたちは多かったでしょう（少なくとも大谷選手の登場までは）。創造的は、非現実的でもあります。創造することを対象者任せにすると、創造的なキャリアは簡単に捨てられてしまうかもしれません。Gelatt は、人が自分の信念に挑戦し、変えていくには、勇気とカウンセリングが必要であるともいいます。しかし、もちろんですが、ただ創造的であればよいわけでもありません。

キャリア教育・研究における創造性は、支援を受ける側にも、支援をする側にも重要です。仕事を含み、人が生きていくために重要、と表現してよいかもしれません。創造性研究の分野でも「創造的自己」といった興味深い動きがあるようです（石黒・清水・清河(2022)など参照）。Gelatt を参照すれば創造性を高められるとまではいいませんが、創造性が無視されたり、削がれていくことに待ったをかける支援はできるのではないのでしょうか。合理的も、創造的も両方を考慮しようとする Gelatt の晩年の著作は、実践者の創造性を刺激してくれると思います。

参考資料

Gelatt, H. B. (1989). Positive uncertainty: A new decision-making framework for counseling. *Journal of counseling psychology*, 36, 252.

Gelatt, H. B. (1993). Future sense: Creating the future. *Futurist*, 27(September-October), 9-13.

Gelatt, H. B. (2021). *Future sense: See the forest and the trees*. USA: Gelatt Partners.

Gelatt, H.B., & Gelatt, C. (2003). *Creative decision making: Using positive uncertainty*. Crisp Learning.

石黒 千晶・清水 大地・清河 幸子 (2022). 誌上討論 「『創造的自己』をめぐって」 編集にあたって *認知科学*, 29, 266-269.

Gelatt によるブログ「Positive Uncertainty」

<https://hbgelatt.wordpress.com>

人生100年時代における高齢期のライフキャリア —喪失と死が持つ意味に着目して—

川島大輔

中京大学心理学部

1. 高齢期のライフキャリアにおける喪失と死

このエッセイでは、人生100年時代における高齢期のライフキャリアについて考えてみたい。なお、ここでのキャリアとは生き方、人生、経験を意味し、ライフキャリアは一生にわたる生き方や人生そのものである。

とはいえ、高齢期におけるライフキャリアを考えた際に、やはり注目されるのは働くことや社会参加（賃金労働だけでなく、家庭での役割や地域での奉仕活動なども含めて）だろう。また、生き方や人生に視野を広げてみても、「まだできる」ことや社会的役割が強調されてきた。例えば健康寿命やフレイル予防といった言葉は、できる限り長く、健康で社会活動を営むことができる高齢者が念頭に置かれている。しかし超高齢多死社会の到来を目前に控え、また COVID-19 のパンデミックを経験した私たちはすでに、この「前向き」な前提の限界にも気がつきはじめています。

実際、老いや死別による喪失を避けることはできず、最後には自分自身の人生の終焉を迎えなければならない。特に後期高齢者や超高齢者のライフキャリアを考える際、「まだまだ頑張れる」という見方一辺倒では厳しい。健康や生産性にこだわりすぎると、健康悪化や喪失、そして死は人生の敗北になってしまう。少しずつであっても、喪失を諦観し、徐々に死と向き

合うことが必要になってくるのである。

2. 高齢期の身終いと喪失への向き合い方

高齢期の身終いと喪失に関する現代日本の社会状況を見てみると、例えば終活ブームの勢いは衰えることがない。また終末期医療の分野を中心に、人生会議（Advance Care Planning）の重要性が繰り返し説かれるようになってきている。ここから、自分自身の人生を責任を持って締め括ることも、人生の最終段階（End-of-Life：エンド・オブ・ライフ）のライフキャリアと考えることができるのではないだろうか。

また本来、他者との関係性抜きに、身終いについては語れない。たとえば「なるべく質素でお金をかけずに葬儀をしてほしい。骨は散骨して欲しい。」という希望を持っていたとして、それが実現するかどうかは結局遺されたもの次第なのである。終末期医療や葬儀などについての希望を生前からよく話し合っておくようにと言われるのはこのためである。

確かに一昔前までは慣例に沿って葬儀や供養が行われていた。しかし、もはやそのような時代ではない。お願いしたいこと、したくないことを文章に残し、またよく話し合っておかなければ、伝わらない。デジタル遺産（Facebook や Twitter などの記録をどう処分するか）といった新しい問題もある。そして残念なことに、ほとんどの人は必要な知識も心構えもない。これまでの慣例や経験もあまり役に立たない。そうであるからこそ、こうした人生の身終いの仕方について、適切な知識や技能をあらかじめ身につけておくことが必要な時代なのである。

これは老いや死別によるグリーフ（悲嘆）に関しても同様である。かつての素朴な段階説（否認から受容に至る直線モデル）はすでに解体され、現在では喪失を経験した人が能動的に意味を見出すプロセスに注目が集まっている。老いや身近な人との死別は、これまでも高齢期における大きな問題の一つであったが、グリーフを経験し、意味づけ、その悲しみと共に生きていくこともまたライフキャリアの一部とも言える。

このように、身終いと喪失への向き合いは高齢期におけるライフキャリアとして大きな位置を占めるだろう。しかし、かつて地域で共有され、意味づけの雛形を提供していた死や喪失についての大きな物語はもうない。また葬儀や供養の簡素化と相まって、死やグリーフの個人化が際立ってきている。同時に、これまでは過度に組織化され、医療現場に限定され、一部の専門家が知識とスキルを独占していた死や喪失との向き合いが、非専門家や地域コミュニティにも開かれつつある。いずれにせよ、これまで専門家に委ねていた判断を、私たち一人一人がしなければならないのである。

近年、デス・リテラシーやグリーフ・リテラシーという言葉が提唱されて、活発な議論が行われているが、その背景には上記のような事情がある。

3. 身終いと喪失への向き合いを可能にする新たなキャリア教育への期待

死や喪失にどう向き合うかは現代を生きる高齢者にとっての重要な課題である。そして死やエンド・オブ・ライフ、そしてグリーフなどについての必要な知識やスキルを身につけ、身近な他者や専門家と対話をするのが今後ますます求められるだろう。そうであるならば、今まさに、身終いと喪失への向き合いを可能にする新たなキャリア教育が必要ではないだろうか。

また、ここまで高齢期のライフキャリアと死生の関連を述べてきたが、当然ながら、喪失や死は人生後半だけの問題ではない。パンデミックや複数の大規模災害を経験した私たちは、人生半ばで病に倒れたり、身近な人を突然失うライフコースもあることに気付いてしまっている。そうであるならば、若い世代のキャリア教育においても、死や喪失を含めること、もっと言えば、死や喪失について人生の早い段階から学び、備えておくことが大切なのではないだろうか。

「今日より良い明日を生きる」という素朴な価値観を抱くことはもはや難しい。生と死、その両行的な意味を誠実に見つけようとする人生観を持ち、悲しみや苦痛を抱えながらも明日を生きようとすることを支える、キャリア教育の今後の展開に大いに期待したい。

参考資料

川島大輔 (2013). 高齢期の社会性 二宮克美・浮谷秀一・堀毛一也・安藤寿康・藤田主一・小塩真司・渡邊芳之(編), パーソナリティ心理学ハンドブック 福村出版 (pp.322-327)

川島大輔 (2016). 老年期における死 川島大輔・近藤恵 (編), はじめての死生心理学——現代社会において、死とともに生きる 新曜社 (pp.175-188)

川島大輔 (2020). 多様な喪失とグリーフ・リテラシー——思いやりに満ちたコミュニティの実現に向けて—— 心と社会, 182, 57-62.

泥んこになって楽しんだ、あの日のような好奇心・・・
キャリア教育でどのように育む？

中谷陽輔

社会福祉法人盛和福祉会 児童養護施設「京都大和(だいわ)の家」
家庭支援専門相談員
児童家庭支援センター「山城こども家庭センターだいわ」 副センター長

■自己紹介と、ある実習生のエピソード

私は児童福祉施設の相談員として現在の法人に勤め、12年目となります。

唐突ですが、私が最近経験した出来事を紹介します。

翌月に当施設での実習を控えた学生さん。

実習前オリエンテーションの最後、私から何か質問がないか聞くと、こう答えました。

「・・・子どもと、どうやって遊んでいいかわからないんです。
どうしたらいいですか？」

正直、子どもがいる施設へ実習に来るのに！？と面食らいました。が、考えてみると、とても素直な質問だなど、かえって好感をもちました。

詳しく聞くと、その学生さんにはきょうだいがおらず一人っ子で、親戚に幼児はいるけど普段は関わりがない、とのこと。それまで話していた印象としても、真面目そうな学生さんで、さぞ勉強熱心なのだろうな、という方でした。

返答として「子どもは遊びの天才なので、どのように遊んだらいいか、子どもたちに教えてもらってください」と伝えました。すると腑に落ちてもらえたようで「はい！」と頷き、翌月からの実習でも、子どもたちと砂場で一緒に遊ぶ姿をよく見かけました。本人や周囲から聞いていると、子どもたちに翻弄されることもあったようでしたが、無事に実習を終えることができました。

少々、自己紹介を追加します。私が勤めている法人では、児童養護施設・乳児院そして児童家庭支援センターといった児童福祉事業を行ってい

ます。そこで私は、児童養護施設の家庭支援専門相談員(Family Social Worker, FSW)と、児童家庭支援センターの副センター長を兼務しています。

具体的業務として、地域の保護者支援（カウンセリング・ケースワーク）を行うこともあれば、施設職員（実親に代わる養育者）へのコンサルテーションを行うこともあったり、さらには様々な背景を持つ子どもたちの日常生活支援（家事育児）も行っていたり・・・と、とにかく色々な活動をしています。

このように書くと、実践バリバリの人のように受け取られるかもしれませんが、今の法人に勤める前は、臨床発達心理学を専門としようとする研究者の端くれ（博士後期課程の院生）でした。論文を書くより非常勤で行うようになった実践の場のほうがやりがいを感じるようになってしまい、12年前に子ども福祉の世界に飛び込み、今に至ります。

歳月を経る中で、プライベートでは結婚し、二児の父となりました。まだ二人とも幼子ですので、とにかく公私ともに子ども・子育てにまみれた生活を送っています。

そのような生活をしていると、専門上、いくら子どもの思いや気持ちを受容することや、褒めることが大切、だとわかっているけど、実際にはそればかりでいられない、ということも多々聞きし、経験してきました。アタリマエだとわかっちゃいるけど、なかなかできない・・・そんなことばかりでした。

「研究」も「実践」も、そして本特集が着目するそれらの「つながり」も、より良くしていくためには、試行錯誤を重ねていくことが一番。だとわかっているけど、なかなかうまくいなくて凹む。そのように感じる人が多いからこそ、本特集が組まれたのだと邪推します。

私は、それらのハードルを飛び越えるために肝となるのは「遊び」だと考えています。

そのように考える理由を、次に述べたいと思います。

■アタリマエだと思っていることが「アタリマエでなくなる体験」を楽しむために

「遊び」は、思いもよらない展開になるという偶発性にこそ、面白みがあります。強制的でないことや、時間・空間やルールがある程度定まって

いることも、遊びの重要な要素です。ただ結果が分かりきった活動は、決して「遊び」になりません。

研究・実践それぞれを自分なりに理解しつつも、それらに固執せず、むしろそれらの行き来をいかに「楽しめる」か、いかに「遊べる」か。

それこそ泥団子を作ったり、ただ泥と戯れたり、泥でできるものの可能性を探ったり、水の量を調整してみたり、思った通りにいったりいかなかったりする。そんなイメージです。

「言うは易く、行は難し」とはよく言ったもの。簡単に理屈通りにいかないのが実践というもので、がむしゃらに泥臭く実践していくことでこそ培われる勘所というのもあったりします。かたや、裏付けとしての理屈・理論がない実践は、再現性のない不安定な実践となってしまいます。

いわゆる研究のための研究、実践のための実践、というのもまた、一つの在り方だと思います。一方で、研究と実践のつながり、といったことを考える場合、抽象と具体を行き来できるような柔軟な「知」の活用が求められます。そして「体」で経験することとの接点が無いと、それらの行き来がそもそもできません。

「知・徳・体」の考え方を援用すれば、「徳」も重要でしょう。乱暴だったり人を傷つけたりするような活動ではなく、自分も楽しめて、皆が笑顔になれるような「遊び」の活動。そのためには、視野を広げたり相手の立場になったり、ルールや枠組みを自覚したり、自他を卑下もせず驕りもせず・・・といった、節度をもったスタンスも求められます。

私自身、遊ぶよりも勉強をする時間のほうが長い人生でした。だからかもしれませんが、学んできたこと、アタリマエだとわかっていることを実践の場でうまく活かせない・どうしたらいいかわからない、という苦惱もまた、長い間もっていました。そういった自身の体験からも、もっと早く「遊べる」ようになっておけばよかったと、最近になって思います。

何より、つまらなそうな大人と、子どもは遊びたがりません。

研究と実践のはざままで、泥まみれになって遊んで、楽しむ大人であるために、我々ができることは何か。それを考えて実行する。試行錯誤そのものを、まず自分たち大人が楽しんでみる。

そんな姿を次世代に見せられたら、それが一番のキャリア教育になるのかもしれない。

そんなことを、ちょっとマジメに、考えています。

ここまで述べてきたように、支援対象とされる方々との関わり、決して理屈通りにはいかない実践での関わりや、実践の場ならではの探究課題に、いかに関心や好奇心をもって臨めるか、その土台をいかに育めるか・・・研究と実践の「つながり」について志向するキャリア教育には、そんなテーマが求められているように思います。

・・・さて、どう育んでみましょうね。

研究と実践をつなぐキャリア教育－臨床心理学と実践をつなぐ

山蔦圭輔

神奈川大学人間科学部

合同会社メンタルヘルスケア・ネットワーク

一般社団法人臨床心理職能開発機構

「こころの時代」「ストレス社会」と呼ばれて久しい昨今、心理的支援を十分に提供することは、社会的にもニーズが高いものといえます。しかしながら、カウンセリングや心理療法をはじめとした心理的支援を気軽に受けることができるのでしょうか？また、心理的な治療を受けること（たとえば、心療内科や精神科を受診すること）はみなさんにとってどのようなイメージがあるのでしょうか？

大学で臨床心理学概論（臨床心理学の基礎を学ぶ講義科目）の中で、こうした問いかけをすると、やはり「ハードルの高さ」を感じるという人々が多い印象を受けます。これは、心理的支援を受ける状態や精神疾患と呼ばれる課題に対する誤った理解や、心理的支援そのものに対する理解が引き起こしていると考えられます。今回は、特に後者に挙げた「心理的支援そのものに対する理解」に焦点を絞り、臨床心理学領域における研究と実践とのつながりについて考えてみたいと思います。

こころの支援は意味がある？

こころは目に見えないものであり、その傷つきや困難さももちろん手に取るように分かるものではありません。たとえば、骨折をしたときに、外

科的な治療を受け、時間が経つことで元通りに戻る（完治する）というように、明快にその効果を実感することは難しいとも言えます。また、完治するというのも、何をもって「完治」とするのかも難しいものです。したがって、こころ、すなわち心理的側面に介入し、より良い状態へ移行することを目指すとき、クライアント（カウンセリングを受けにいらっしゃる方々をクライアントと呼びます）や患者さんは「本当に良くなるのだろうか」「何をされてしまうのだろうか」「どのくらいの時間がかかるのだろうか」などなど、さまざまな疑問や疑念を抱えていることもあります。これは無理やり連れて来られた方々ばかりではなく、自主的に心理相談室や医療機関を訪れている場合であっても持たれるものです。

こうした中、1990年代以降、Evidence Based Practice という姿勢が心理的支援を実践する上で重視されるようになりました。Evidence Based Practice とは、「根拠に基づく実践」と邦訳されるもので、心理的支援を実践する前提として「効果のある方法を用いること」「実践の効果測定を十分に行うこと」「本当に効果のある方法を開発すること」などが求められる姿勢です。いずれにしても、より科学的な姿勢が求められるもので、実践家として心理的支援を行うことのみならず、科学者としての姿勢を持ち、より実証的な検証を行うことが求められます。そして、臨床心理学領域において、Evidence Based Practice を実現するためには、十分な研究を行い、その結果を臨床現場で活用するという関係が何より大事です。

こころの専門家としてのキャリアを考える

心理的支援を担う専門家は多様です。こうした中、臨床心理士や公認心理師という資格を有する人々（以下、心理専門職とします）も、これからの心理的支援を担う専門家です。特に公認心理師は、2019年に施行された公認心理師法に基づき、一定の教育と資格試験に合格した後に取得することができる国家資格です。私が勤める大学でも臨床心理士や公認心理師の養成を行っており、それらを取得することを希望する学生も多く、心理専門職に対する魅力を感じる学生が多くいることをうれしく感じています。一方で、心理専門職の現状をみると、非正規雇用が多く、また、その賃金も十分なものと言えない場合もあります。

たとえば、週2日スクールカウンセラーとして勤め、その他は医療機関や相談機関などで勤め、その間で自己研鑽のためにスーパービジョン（スーパーバイザーと呼ばれる経験のある心理専門職から教育的な指導を受ける機会）を受け、また、各種研修を受けるなどといった生活は、ほんの一例ではありますが、良くあるケースとも言えます。とても遣り甲斐がある

ことは確かですが、そこでの不安定さ(雇用の形態や経済的状況など)は、今後の課題ともいえるでしょう。こうした中、心理専門職がより「安心して」職業生活を送るために何ができるのかを考えると、そのひとつが「意味のあるところの支援」を実践することが挙げられます。これは、私たち心理専門職が実践することが、本当に効く、本当に意味があるということを示すこと、そして、それが社会に発信され、社会的認知を高めることに他なりません。そうすることで、心理専門職の本当の価値がより一層理解され、心理的支援を受けることでメンタルヘルスが高まることが期待される人々に、より容易に心理的支援が届くという好循環も期待できます。

心理専門職として活躍し、効果的な支援が多くの人々に届くことが、地域社会のメンタルヘルス向上や予防につながります。そして、そのためには、私たちは十分に研究を行い、その研究を実践につなげることが求められます。また、こうした蓄積が、心理専門職の価値を高めることも期待されます。心理的支援はとても魅力的です。その魅力をずっと感じながら研鑽し、より良い専門家としてのキャリアを築くこと、それを上手に発信していくことが必要不可欠です。

キャリアを支えるということ

キャリアは人生です。したがって、キャリアを支える仕事は、支援対象者の人生を支えることといっても過言ではありません。そこでは、何度もお伝えしてしまいましたが、「しっかりと効果のあること」を提供することが求められるでしょう。一方で、いち実践家として思うことは「その人にとって意味のあること」を提供することも、同時にとても大切なこと、ということ。これまでの論調とは相反するかも知れませんが、誰かを支えることは、その対象者が老若男女問わず、支援者として十分な経験を積むことが求められます。経験は何物にも代えがたい、貴重なものです。経験を補完するものが理論であり方法論であり、すなわち根拠に基づく実践です。支援対象者の多様な人生を支え、より良い毎日を送るお手伝いができる仕事はとても遣り甲斐があるもので、もっともっと誇りを持ち、もっともっと専門家として伸びやかに発達することを目指し、専門家同士も協働し、より健康度の高い社会を築きましょう。みなさんと手を取り合って成長できることを楽しみにしております。

【書評】『ゆるい職場 ―若者の不安の知られざる理由―』

『ゆるい職場 ―若者の不安の知られざる理由―』

(古屋星斗 (著) 中公新書ラクレ 2022)

<https://www.chuko.co.jp/laclef/2022/12/150781.html>

松尾智晶 (京都産業大学)

本書は個人、組織、社会全体の変化を視野に入れた示唆に富む一冊である。その示唆とは、昨今の若手社員 (以下、若手) に関する謎 ―好況でなく、かつ労働環境が急速に改善しているにもかかわらず、なぜ離職率が上昇しているのか― に対する著者の分析と主張、そして対処の提案である。著者の主張を先取りすれば、その要因は書名である『ゆるい職場』の出現、すなわち働き方改革推進により2010年代後半から職場に関する法令が改正された『職場運営法改革』(著者の造語) による若手と職場の関係性の変化である。そのことが「かつてのような厳しい労働環境が許容される余地 (P.41)」がなくなり上司・先輩から叱責されないまま成長実感が得られず不安が高まって「職場がゆるくて辞める」というグループを生み出した (P.65)」。著者は、特に大手企業で高まる若手の離職率向上は「不満型転職から不安型転職へ変わった」ゆえと述べる。本書はこれまでの若手育成の方法論が通用しない、すなわち『先輩や上司との関係負荷が低い環境 (長時間労働が困難、叱責しにくい状況) で職務の質的負荷の向上を目指す』という難題を提示する。著者自身が1986年生まれで若手育成に直接的に関わる30代であるためか、本書からは当事者意識と危機感が強く感じられる。

本書は8章で構成され、「職場がゆるくて辞める」というグループが発生する状況と要因分析をした上で、若手育成の成果を挙げている実例が紹介され、さらに学校教育における社会的経験・意思決定と選択の経験の重要性が強調される。離職率の上昇が個人のキャリア形成にポジティブな影響を与えるためには、本人の自律性が重要であることは自明である。しかしながら著者は『ゆるい職場』が「会社が若者を育てる」から「若者が会社を使って育つ」へ転換する不可逆の変化であるが、若者に対して「自由度は高まっているが、同時にみえてくる問題は「自律なき自由」になっているのではないか (P.235)」と警句を告げる。自律的なキャリア形成に消極的な者は、社会人となり消極性を増してさらに自律性を失うという調査結果に著者は強い危機感を抱く。「会社人間になって会社に言われることだけ言われたとおりにこなす社会人になる」ことの「魔力」に抗うことがいかに難しいことか (P.236)」という一文は読者に自省を促す強さをもつ。い

っぽうで「自律的な姿勢を身に着けている若手のほうが、離職率が高い (P.175)」という、個人と組織の関係性における難題をも読者につぎつける。

最後に、第七章『助走としての学校生活』について、評者の見解を述べたい。キャリア教育に携わる私たちが注目すべきは「入社前の社会的経験は入社後の成長にプラスになる (P.99)」「2016 年卒以降とそれ以前において、入社前の社会的経験の有無が持つ意味がまったく異なっている (P.195)」という指摘である。『ゆるい職場』出現前の 2015 年卒まではそうではなく、「2016 年卒以降から入社前の社会的経験が有る者のほうが入社後の成長実感が高くなるという結果から「入社前の社会的経験」として学生時代の経験・行動の重要性が本章で繰り返し主張される。キャリア教育における社会的経験としては、職場見学、職場体験、インターンシップ、産学連携の PBL (課題解決型授業) などが想起されるが、本書は「インターンシップにたくさん参加していた人ほど学習動機が向上していた傾向がみられる (P.202)」を示すにとどまり、いかなる社会的経験が入社後の成長実感、キャリア形成に対する自律性を高めるかに関する言及はない。今後の筆者の研究の深化を期待するとともに、私たちキャリア教育研究に携わる者も看過すべからざるテーマであろう。

私たちはすでに安定的な成長を前提にできず、不安定かつ情報が横溢し自由な働き方の選択が可能な社会に生きている。本書はキャリア教育に携わる私たちの就業観およびキャリア教育・キャリア形成支援に対する見識を深める一冊である。

■ 【お知らせ】 第 45 回研究大会

日 時 2023 年 10 月 28 日 (土) 29 日 (日)

場 所 愛知教育大学 (〒448-8542 愛知県刈谷市井ヶ谷町広沢 1)

H P GW 明けよりオープン予定

参加費 (事前振込のみ)

正会員 6,000 円 学生会員 3,500 円 発表論文集掲載料 1,000 円

シンポジウム企画費 (1 件) 5,000 円 連名発表費 (非会員) 2,000 円

日 程 ※発表申込数に応じて変更の可能性があります。最新情報は大会 HP に随時掲載しますので、ご確認ください。

【10 月 28 日 (土)】

- キャリアカウンセラー研修講座（別途申込者のみ）
- 大会実行委員会企画 公開シンポジウム（オンライン配信あり）
テーマ 「キャリア教育にかかわる者が持つべきマインドとは」
登壇者 藤田晃之会員（筑波大学）、下村英雄会員（労働政策研究研修機構）、鈴木映司会員（沼津東高等学校）、渡邊江李賀氏（NPO 法人 ICDS、名古屋市立中学校キャリアナビゲーター）他
司 会 浦上昌則会員（南山大学）
- 研究交流会（飲食を伴う懇親会ではありません）
- 定期総会

【10月29日（日）】

- 個人研究発表
- 会員企画シンポジウム

◆問い合わせ先 jssce45th@gmail.com

（お問い合わせの際は、お名前、ご所属、連絡先を明記してください）

◆今回の研究大会では、プログラム・大会発表論文集は pdf による配信とさせていただきます。印刷物による配布は行いません。各自事前にダウンロードしてご持参ください。

◆飲食を伴う研究懇親会は開催致しません。

【お知らせ】 第41回研究セミナー

名 称 日本キャリア教育学会 第41回研究セミナー
日 時 2023年6月24日（土）13:25～17:50
会 場 九州産業大学3号館3階3306AB室／オンライン（※）
形 式 対面とZoomでのオンラインによるハイブリッド開催
主 催 日本キャリア教育学会
申 込 [申込フォーム](#) ([google フォーム](#)) からお申し込みください。
期 限 2023年6月14日（水）24:00
備 考 参加費無料、オンライン参加希望者は100名程度（先着順）

プログラム：

- 13:25-13:30 開会
13:30-14:15 基調講演「新時代に対応した高等学校改革の推進」
14:25-15:10 全体講演「高等学校普通科改革とキャリア教育」
15:25-16:25 シンポジウム
 話題提供1「キャリア教育ですすめる普通科改革」
 話題提供2「地域や企業と連携したキャリア教育の実際」
16:35-17:20 ディスカッション
17:25-17:40 総括
17:45-17:50 閉会

※詳細は学会サイトから

<http://jssce.wdc-jp.com/convention-seminar/csnew/>

■ **【お知らせ】 国際交流セミナー**

- 名 称 日本キャリア教育学会 国際交流セミナー2023
テーマ つながる学びと探究学習
 ～学校と社会、教科と教科、現在と未来をつなぐ～
日 時 2023年7月2日(日) 13:30～16:30
会 場 早稲田大学国際会議場 井深大記念ホール
形 式 対面とZoomでのオンラインによるハイブリッド開催
主 催 日本キャリア教育学会国際交流委員会
共 催 早稲田大学教育・総合科学学術院／日本キャリア教育学会関東地
 区部会／早稲田キャリア教育研究会
後 援 公益財団法人日本進路指導協会
申 込 [申込フォーム \(google フォーム\)](#) からお申し込みください。
備 考 参加費 学会員 1,000円 会員以外 2,000円
 ※早稲田大学学生・院生、ガイダンスカウンセラー資格をお持ち
 の方は会員と同様。
 ※当日参加(対面のみ)の場合は、参加費に加えて
 手数料1,000円
 ※オンライン参加を希望の方は事前申込の方に限ります。

○基調講演(同時通訳あり)

「探究学習‘GLOBE’をキャリア関連学習として『つながる学び』で展開：
スキル、エージェンシー、そして“意欲”を児童生徒から引き出す！」

講師：Svetlana Darche (Senior Research Associate, WestEd)

○質疑応答

○パネルディスカッション

「つながる学びと探究学習」

パネラー：岡部敦（清泉女学院大学）、西美江（関西女子短期大学）、
三村隆男（早稲田大学）、宮古紀宏（国立教育政策研究所）

司会：永作稔（十文字学園女子大学）

■ **【お知らせ】 40周年記念若手研究助成**

今年度も40周年記念若手研究助成を公募しています。

締切が2023年6月30日（木）までになっています。

以下の情報および応募資格を参照のうえ、ふるってご応募ください。

<http://jssce.wdc-jp.com/news/youngresearchsupport/new/>

■ **【お知らせ】 学会への寄贈図書一覧（2023年1月～4月）**

以下の図書につきまして、著者/出版社より本学会にご寄贈いただきました。ここに感謝申し上げます。

- ・『ゆるい職場 ―若者の不安の知られざる理由―』（古屋星斗（著） 中公新書ラクレ 2022）
- ・『就活からの学習 大学生のキャリア探索と初期キャリア形成の実証研究』（高崎美佐著（著） 中央経済社 2023）

+++++
◇日本キャリア教育学会ニューズレターは、日本キャリア教育学会
情報委員会が発行し、特集テーマに沿った記事を会員の皆様にお届け
するものです。

◇会員の皆様のメールアドレス確認・登録を継続的にしております。
身の回りの会員でニューズレターが届いていない方がおられた場合、
学会事務局（jssce-post@as.bunken.co.jp）宛に受信用メールアドレス
から登録申請していただきますよう、お伝えください。

◇ニューズレターに対する皆様のご感想・ご意見・ご提案を随時お待ちしております。情報委員会 (jssce-ic@googlegroups.com) までお気軽にご連絡ください。

◇キャリア教育関連の著作を発刊・発表した会員は、是非とも学会事務局まで献本いただければ幸いです。学会ウェブサイト上に書名と著者名を掲載した上で、書評欄で取り上げさせていただきます。

◇文中敬称略

日本キャリア教育学会情報委員会 発行
委員長：京免徹雄 副委員長：家島明彦
委員：市村美帆、高丸理香、竹内一真、
橋本賢二、本田周二、松尾智晶、
丸山実子、三保紀裕
